BACH　スクリーンコンサート

２０２１．５月

５月の主題　　交響曲（シンホニー）

交響曲を演奏する楽器は大きく、弦楽器、木管楽器、金管楽器、打楽器の４つに分けることができ、ハイドンが完成させた形式により４楽章で構成されるのが一般的です。
ベートーヴェン以前までの交響曲は大作と言えるものは多くありませんでした。
オーケストラの編成も一桁～40 人程度で演奏され、100 人近くの奏者を要する交響曲はありませんでした。
古典派の作曲家ハイドンは 104 曲、モーツァルトは 41 曲の交響曲を書いています。
ベートーヴェンの書いた交響曲が９つで、交響曲を壮大なものへと発展させたのがベートーヴェンでもあります。

１、ベートーヴェン 交響曲 第６番 ヘ長調 作品 68 《田園》　（４０分）

ベートーヴェンの作った交響曲には、標題のついている作品がいくつかありますが、ベートーヴェン自身がタイトルを付けたのはこの交響曲だけです。そして各楽章にもそれぞれ標題が付けられています。ベートーヴェンはこの曲について「単なる田園の情景の描写ではなく、感情を表現したもの」と語っています。

第１楽章：田舎に到着した時の愉快な気分

明るく親しみやすい有名な旋律で、田舎に着いた時の晴れ晴れした愉快な気分が表現されます。

第２楽章：小川のほとりの情景

小川が静かに流れる情景を暗示する第１主題で始まります。楽章を通して小川のせせらぎの音が弦楽合奏で奏でられ、終結部ではフルートでナイチンゲール、オーボエでうずら、クラリネットでカッコウを真似た音型も演奏されます。

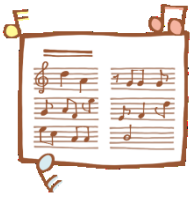
第３楽章からは楽章が途切れることなく第５楽章まで連続して演奏されます。

第３楽章：田舎の人々の楽しい集い

田舎の舞曲を思わせる歯切れの良い主題、その後のオーボエのひなびた旋律に、わざと変なタイミングで入ってくるファゴットもユーモラスです。

第４楽章：雷雨と嵐

楽しい村民の集いを突然襲う、昼下がりの激しいにわか雨の様子が、非常に描写的に描かれています。楽章の最後では雷の音も遠ざかり、晴れ間から麗らかな田舎の情景が奏でられ、次の楽章に入ります。



第５楽章：牧歌。嵐の後の喜びと感謝の気持ち

雨が上がり、日が差し、自然への畏敬と感謝の牧歌が歌い上げられます。まずクラリネットがドルチェで奏で、それがこだましてからホルンに移ります。これに導かれて、感動的な牧人の歌がヴァイオリンからヴィオラ、チェロ、ホルンに受け継がれ喜びを奏でます。

プラスα

ドボルザーク　交響曲第９番「新世界」から第２楽章　（１２分）

全４楽章からなる第２楽章、
日本人にも耳馴染みのあるイングリッシュホルンによる主部の主題が登場します。
この主題はドヴォルザークの死後に愛唱歌（「家路」「遠き山に日は落ちて」など）として歌詞付きで編曲されています。
「遠き山に日は落ちて」の歌詞とメロディは、日本人なら一度は必ず耳にしたことがあるのではないでしょうか。このメロディは、静かな短い序奏の後にすぐに現れます。農村の素朴な夕べの祈りが目に浮かぶ曲です。

ハイドン: 交響曲第 101 番「時計」：第２楽章　（8分）

文化放送百万人の英語のオープニングテーマでした。
ニックネームどおりの時計をイメージさせる単調なリズムの上に滑らかなメロディが出てきます。
このリズムの刻みはファゴットの「ポッ・パッ・ポッ・パッ」という音が中心になっていますので，どことなくユーモアを感じさせてくれます。規則正しいリズムの伴奏部が、『時計』の振り子を思わせます。